

## 慈円と定家の句題和歌考（四）

丸山正道

Masamichi MARUYAMA

### （一）

原詩、0628、卷13、律詩、曲江憶元九、  
春来無伴閑遊少。  
行樂三分減二分。  
何況今朝杏園裏。  
閑人逢尽不逢君。

押韻は、二句、四句である。題詩は、一句目である。

一句目の訓みは、春来伴なうもの無く、閑遊少なし。

原詩の題の意と一句目の意。

作者・白居易は、曲江にて元九を憶う。春がやって来たが、連れ立って春を満喫する親友・元九が、今ここには居なく、誠に寂しい限りである。

「閑遊」の「閑」は、ヒマ。シヅカ。(大字典、2338頁)。「閑遊」の「遊」は、アソブ。出デ行く。アソビ。マジワリ。ヨシミ。交友。(大字典、2227頁)

従って、時間のヒマにまかせて、シヅカにマジワリ、語り合う人は、非常に少ない。誠に寂しい限りである。

「曲江」は、「長安の東南にある遊樂地」。「元九」は、白居易の親友。元禎、字は微之。

(779-831年)の人。

白居易詩「贈元禎」(0015)の中で、

自我從官游  
七年在長安  
所得唯元君  
乃知定交難

の詩句は、注目に値する。作者・白居易が、長安に在って、真の親友は、「元君」のみと。乃ち、「定交の難きを知る」と。元禎は、白居易(772-846年)より七歳年下である。

憲宗元和元年(806)、白居易35歳。白居易、長安在住。

在長安(白居易年譜、35頁)

唐代制科の一つ、「應才識兼茂明於體用科」(白居易年譜、35頁)受験の為、元禎と華陽館に居住し、門を閉じて、勉学に励む。

与元禎居華陽館、閑戸累月、(白居易年譜、35頁)

その成果が実を結んで、合格となる。同期の合格者は、次の如し。

与元禎、韋惇、獨孤郁、曹景伯、韋慶復、羅讓、崔讓、薛存慶、李蟠、元修、沈傳師、蕭俛、柴宿、陳怙、蕭睦、同登第、(白居易年譜、35-36頁)

この唐代制科に照らして、第何番目に合格したか、であるが、それについては、次の如し。

白居易は、四番目。元禎は、三番目。

入第四等。(白居易年譜、36頁)

元禎制科入三等。(白居易年譜、36頁)

但し、この唐代制科制度は、第一等、第二等は、例が無い、とのことである。

按、唐代制科照例無第一等第二等。(白居易年譜、36頁)

かくして、今回は、第一番目が、元禎、第二番目が、白居易、ということになる。

こうして、白居易は、贅屋尉に任命され、元禎は、左拾遺に任命された。

(四月)二八日、(白居易)授贅屋尉(白居易年譜、36頁)

(元禎)授左拾遺(白居易年譜、36頁)

しかし、元禎は、中央・長安で業務に励んでいたが、しばしば「上書」「時事」を論じていたが、それが、「執政者」の目にとまり、それが為に「河南尉」に左遷されてしまったのである。それは、元和元年(806)九月のことであった。従って、元禎は、都・長安を離れることとなるのである。

(元禎)屢上書論時事、為執政者所惡、九月、貶河南尉、(白居易年譜、36頁)

白居易のこの年(806年)の作品、並びにこの年のことに該当する作品として、例えば、

作『長恨歌』、有『贈元禎』(略)等詩、(白居易、36頁)

なお元禎は、この年(806年)、母を亡くしている。

(元禎)(九月)十六日、母鄭氏卒於長安靖安里第、

従って、元禎は、「当時の礼」に従って、「退官」し、「三年」の喪に服することとなるのである。

以上が、白居易と元禎との交友の一端である。又、詩(0628)の題の「元九・元禎」の説明の一端でもある。

## (二)

この詩の一句目が、慈円と定家の詠歌の詞書き、となっているものである。

従って、その一句目の「春来無伴閑遊少」の詩句について、考えていくこととする。

「春来」の表現には、春がやってきた喜び、が語られていると思う。

白居易の詩から「春」に関してのものを、まず二、三あげて、その感慨を見ていくこととする。

春雪(0029)(諷諭)

元和歲在卯。六年春二月。

月晦寒食天。天陰夜飛雪。

連宵復竟日。浩浩殊未歇。

大似落鷲毛。密如飄玉屑。

寒銷春茫蒼。氣變風凜冽。

上林草盡沒。曲江水復結。

紅乾杏花死。綠凍楊枝折。

所憐物性傷。非惜年芳絕。

上天有時令。四序平分別。

寒燠苟反常。物生皆夭闕。

我觀聖人意。魯史有其說。

或記水不氷。或書霜不殺。  
上将敬正教。下以防災孽。  
茲雪今如何。信美非時節。

元和六年、春二月。春半ばに、雪に見舞われた、その景を詠んだものである。

「月晦寒食天」「天陰夜飛雪」。この月は、肌寒く、天は俄にかき曇って、風も強く、夜雪を飛ばしている程の風雪である。「上林草盡没」「曲江氷復結」。春の草は、悉く萎えてしまい、「曲江」には再び氷りが、張り詰められてしまった。「寒燠苟反常」「物生皆夭闕」。寒いことと、暑いこととが、苟も常に相反しているので、物の性質は、皆おさえふさいでしまっている。従って、「茲雪今如何」「信美非時節」。この雪は、今どう考えたらよいであろうか。雪は、誠に「美」ではあるが、春二月の「時節」には、適っていない。と。

「時節」に適っていないところの「雪」。白居易は、自問自答して、苦しんだあげく、「信美非時節」と答えているのである。

春も今日が最後、その感慨を詠んだのが次の詩である。

三月三十日。題慈恩寺。(0631) (律詩)  
慈恩春色今朝盡。盡日徘徊倚寺門。  
贅憫春歸留不得。紫藤花下漸黃昏。

3月30日、私は、都・長安城内の慈恩寺にやって来た。一日中慈恩寺の境内を徘徊し、寺門にもたれて、行く春を惜んでいた。しかし、行く春を留めることは、残念ながら出来ないのだ。私は、紫色の藤の花房の下で、黄昏時まで立ちつくしていた。

この詩は、こんな感慨の詩かと思われる。

次に早春の曲江の様子を述べた詩を1首。

曲江早春。(0717) (律詩)  
曲江柳條漸無力。杏園伯勞初有声。  
可憐春淺遊人少。好傍池辺下馬行。

「曲江早春」は、元和五年(810)の作。

有「曲江早春」(略)等詩。(白居易年譜、48頁)

曲江は都・長安の東南にある「遊賞地」。杏園は曲江の西に位置している。

曲江では、柳條の若い芽が、まだまだ力ない状態である。杏園では、モズ(伯勞)の初音を聞くことができた。なんと「すばらしい」ことか。早春で「遊覧客」が少ない。「さあ」、池に沿って、馬から下りて、歩いて行くこととしよう。

早春のまだ肌寒い時節。しかし、作者は、「可憐」、と感じ、しかも「遊人少」いことをよいことに、「好」、と声を出して、馬を下りて、池に沿って、散策を始めたのである。

次に「春眠」の詩を。

春眠。(0233) (閑適)

新浴支体暢。獨寢神魄安。  
 況因夜深坐。遂成日高眠。  
 春被薄亦暖。朝窗深更閑。  
 却忘人間事。似得枕上仙。  
 至適無夢想。大和難名言。  
 全勝彭澤醉。欲敵曹溪禪。  
 何物呼我覺。伯勞声関関。  
 起來妻子笑。生計春茫然。

春の長閑ななかで、眠りにつき、その眠りのなかで思いついたことと、突然のモズ（伯勞）の鳴き声によって眼を覚まされ、現実の生活に戻ったこと、その時の詩である。

なかでも、春は薄着でも暖かく、窓が家の奥深い所にあるので、とても静かで、長閑であること。「人間事」はすべて「却忘」してしまったこと。あたかも、「枕上」に「仙」を得たかに似ていること。亦、陶淵明の「彭澤」での「醉」い心地は、こういうものか、と想い、亦、南宋禪の祖と言われている「六祖慧能」（638-713年）の禪定は、こういうものか、と想ったこと。それが、モズ（伯勞）のけたたましい鳴き声によって、眼を覚まされ、ふと現実の生活に立ち戻されてしまったこと。現実の生活は、「生計」は、「茫然」たり、であること。これは、眠りの中の世界と、現実の世界とでは、次元を異にした世界であることを、作者は、詠い、語っているのである。

以上4首、白居易の詩の、春の断章を見てきた。

### (三)

一番初めに提示した原詩、その原詩の内容を、慈円は、どう捉えて、詠歌したのか。その慈円の歌について、見ていくこととする。

春来無伴閑遊少

1911 浅みどり春のながめもやどさびてひとり暮れぬる山のはの空

(「拾玉集」、新編国歌大観、第三卷所収)

「浅みどり」①うすい緑色 ②うす青 (改訂・新潮国語辞典—現代語・古語—28頁)

「Asamidori」アサミドリ (浅緑) 詩歌語。すなわち、Asamidori。(浅緑)

みずみずしくて新しい緑色。また、小枝や若葉の緑色で黄色を帯びた色。(邦訳・日葡辞書、34頁)

「拾玉集」に見られる「浅みどり」の用例歌。

- 2815 世の中はとてかくてもあさみどり思ひし空ははるのあけぼの  
 2810 あさみどり今朝こそ野べに春霞すゑをおもへば秋のゆふ暮  
 3887 あさみどり木のめも春の野べの草に昨日もけふも雨はふりきぬ  
 4059 あさみどりさはべにうつす春の色はみづのみまきのまこもなりけり  
 3579 雲雀あがる春の野沢のあさみどり空に色こきむら霞かな  
 4276 あさみどり春の色ある木ずゑかなまちえてにほふはなのほかまで  
 960 をしほ山こまつの原の朝みどり春の色をば神のめぐみに  
 1204 朝みどり春の霞はあふさかの関ちよりこそたちはじめけれ  
 1911 浅みどり春のながめもやどさびてひとり暮れぬる山のはの空

- 134 あさみどり春ふく風にさそはれて花とともにやちりうせぬべき  
1008 野べにきてゑぐつむさはの浅みどり春めきにけりしづがけしきも  
1721 右 北山樵客  
花はまたじ心は空にあさみどり春めくころの白川のさと  
4760 をしほ山かすむか松のあさみどりはれなばいとど色やこからん  
以上、13例に及ぶ。

次に、「あさみどり」が、八代集において、春の季節の、どういう景物との中で、詠まれているのか、について、見ていくこととする。

浅緑糸よりかけて白露を珠にもぬける春の柳か(古今和歌集、27、僧正遍昭)

景物は、「白露」、「柳」

浅緑野辺の霞は包めどもこぼれてにほふ花桜哉(拾遺和歌集、40、よみ人知らず)

景物は、「霞」、「花桜」

浅緑のべの霞のたなびくにけふの小松をまかせつるかな(後拾遺和歌集、30、民部卿経信)

景物は、「霞」、「小松」

あさみどり乱れてなびく青柳の色にぞ春の風も見えける(後拾遺和歌集、76、藤原元真)

景物は、「青柳」、「春の風」

あさみどり花もひとつに霞みつ、おほろに見ゆる春の夜の月(新古今和歌集、56、菅原孝標女)

景物は、「花」、「霞」、「春の夜の月」

をしなべて木の芽も春のあさみどり松にぞ千代の色はこもれる(新古今和歌集、735、摂政太政大臣(良経)) 景物は、「木の芽」、「松」

あはれなりわが身のはてやあさみどりつゐには野辺の露と思へば(新古今和歌集、758、小野小町)

景物は、「わが身のはて」、「野辺の霞」

あさみどりふかくもあらぬ青柳は色かはらじといかゞ頼まん(新古今和歌集、1253、女御生子)

景物は、「青柳」

以上、8例である。これら八代集の景物を見ていくと、「柳」、「青柳」、「霞」、「野辺の霞」、「白露」、「花」、「花桜」、「松」、「小松」、「春の風」、「春の夜の月」、「木の芽」、「わが身のはて」等となつている。従って、小野小町の1例、「わが身のはて」を除いては、早春の景物との兼ね合いで詠われているものである。小野小町の歌の場合は、わが身の人生上のことが詠まれているので、それとの兼ね合いで「わが身のはてやあさみどり」となっているものである。小町の歌の部立は、「哀傷歌」に属するものである。

慈円の歌の用例歌13例、の場合はどうであろうか。2810、2815、1911、1721の4首の歌は、少し特殊なように思われる。この4首を除いては、早春の景物

「木の芽」、「野べの草」、「春の色」、「まこも」、「雲雀」、「春の野沢」、「むら霞」、「春の色ある木ずゑ」、「はなのほか」、「春の霞」、「春ふく風」、「花」、「ゑぐつむさは」、「松」

との兼ね合いで詠まれているように思われる。

つまり、2815は、「世の中は」、と詠じている雑歌であり、2810は、「あさみどり」、「すゑをおもへば秋のゆふ暮」と詠じていて、やはり、この歌も雑歌である。

1911は、本稿で取り上げている歌であるので、いま暫くこのままにして置くこととする。

1721は、左 南海漁夫(良経)との百番歌合であるので、この歌も今暫くこのままにしておくこととする。

以上が、慈円の用例歌における「浅みどり」と、それとの兼ね合いで詠まれている景物である。

1911に於ける「春のながめも」、に関してであるが、その用例歌は、『拾玉集』では、1911の例歌のみである。又、「新編国歌大観 第三卷(私家集編I)」でも、その用例歌は1911の1例のみである。八代集に於いては、その用例歌は、1例も見当たらない。このようにこの表現は、非常に珍しい表現だ、ということが言えるのではなかろうか。

1911に於ける「宿さびて」であるが、その用例歌は、『拾玉集』では、

528、1911、3528、

の3例である。「新編国歌大観 第三卷(私家集編I)」では、他に1例(秋篠月清集、1263)あるのみ、である。八代集では、1例も見当たらない。

いま、それら4例を例示する。

528 やどさびて夏も人めはかれにけりなにしげるらむ庭のむら草(夏歌)  
(御裳濯百首(二見))

1911、は当該歌。

3528 山里は冬ぞさびしさまさりける人めもくさもかれぬとおもへば  
(以古今為其題目)

やどさびて人めも草もかれぬれば袖にぞのこる秋のしら露(冬歌)

『秋篠月清集』

1263 秋のくれに

やどさびてにはにこのはのつもるより人まつむしもこゑよわるなり

528は、季節は夏、それなのに「人め」は、「かれにけり」と。「庭のむら草」のおい「しげる」風情を、作者は、複雑な気持ちで思っている。「かる」は、「枯る」と「か(離)る」の掛詞としてよく用いられるが、ここは、「か(離)る」である。

「かる」[離る]①はなれる。とおぞかる。②間遠になる。(新潮国語辞典—現代語・古語—)(419頁)

3528は、『古今和歌集』の歌を「其題目」として、詠んだ歌である。「やどさびて」、「人め」も「かれぬ」、その「やど」一帯から人は、離れていってしまった。その「やど」一帯の「草」も、すっかり「枯れ」果ててしまった。わが身を振り返ってみると、わが着物の「袖」に微かに「秋」の面影の「しら露」が、残っていることよ、と詠じたなかに、「やどさびて」が、詠われているのである。つまり、528と3528の歌に共通的に言えることは、「やどさびて」の語感と、歌一首の間には、侘びしさ、寂しさ、やるせなさ、が付きまとっていることである。そのようなことが、言えるのでは、なかろうか。この「やどさびて」の語感も、「春のながめも」の語感と同様、表現語句としては、非常に珍しい部類に属するものだ、ということが言えるのではなかろうか。

「ひとり暮れぬる」の『拾玉集』からの用例歌から、見ていくこととする。

この用例歌は、『拾玉集』では、1911の歌の表現語句のみである。「新編国歌大観 第三卷(私家集編I)」では、他に見当たらない。八代集では、1例もない。従って、この「ひとり暮れぬる」の表現語句は、

非常に稀な表現語句だ、ということが、言えるのではなからうか。

意とするところは、たった1人で、わびしくも、日は暮れてゆくことよ。かと思われる。

「山の端の空」の『拾玉集』の用例歌は、どの位あるであろうか。

この用例歌は、『拾玉集』では、次の所に見られる。

- 4904 いづる月をまてとてこそはくれはどりあやしくくもる山のはの空  
 1355 待ちえたるかげはものかは夜半の月出づるけしきの山のはのそら  
 4079 くれぬとも月まち出でて猶ゆかむ雲こそなけれ山の端の空  
 5022 (述懐)  
     なるかみのこゑもとどろにきこゆなり雲のうへのぼる山のはの空  
 4776 (承久二年三月七日故者忌日於小松谷令修仏事之次、思出云)  
     月ゆゑにまちこし秋の心よりこよひぞかしな山のはの空  
 4334 (月)  
     今夜こそいはねど秋としられぬれ月よりさきの山のはの空  
 1911 当該歌  
 2577 (鹿十首)  
     さしのぼる月にこたへて鳴く鹿にわれもみかさの山のはの空

以上、『拾玉集』に八首。他は、定家の『拾遺愚草』に2首あるに過ぎない。「新編国歌大観 第三卷(私家集編I)」には、他には、見当たらない。八代集には、見当たらない。

『拾玉集』の中で、注目すべきものと思われるのは、1911の当該歌の他は、「承久二年三月七日」の一群の中の4776番の歌と、「述懐」歌群の中の5022番の歌等かと思われる。それら歌群の歌をまず列举すると、それは、次の如くである。

- 承久二年三月七日、故者忌日於小松田令修仏事之次、思出云
- 4766 はるもはなものこれる身にはいくめぐりわかれし色のかへらぬぞうき  
 4767 なにとこはこまつ谷の春風にちりても花は又にはほひつつ  
 4768 わたつ海をたがわが物とかよふらし心のそこをしる人はなし  
 4769 心なきこころにちぎるつまなれやさをしかの声秋のゆふぐれ  
 4770 うたたねやけふたなばたの夕されば空なつかしき荻の上風  
     花  
 4771 とにかくにはなみるほどの思ひかな春の山風みねのしら雲  
     郭公  
 4772 きく空に雨ぞさきだつ時鳥さ月の雲にこゑにはほふなり  
     月  
 4773 秋の月さえ行くかげのあはれさを音にたつるは峰のまつ風  
     雪  
 4774 やま里の庭も木ずゑもふりとちておも影さむき雪の曙  
     待月  
 4775 待つかぜにうきたる雲をはらはせて暮行く空はをばすての山  
 4776 月ゆゑにまちこし秋の心よりこよひぞかしな山のはの空  
     見月

4777 今夜きてまことにねやに別かるらし雲こそなけれひるかあらぬか

4778 ながむれば涙ぞくもる月影のたもとにやどるかげぞさやけき

惜月

4779 いかにせんふけ行く空に山のはをいとひえたれば有明の空

4780 秋ふかみ露をそむるは野べのはな露のそむるは木のはなりけり

以上、15首の歌群である。

もう一つの歌群は、次の如し。

述懐

5007 いかにせんいとひし世こそこひしけれながき命ぞ今はかなしき

5008 あふ夢もかなはぬゆめもうつつにて思ひとくかたもなき身なりけり

5009 ふもとははさかりなりとやながむらむ花まつみねにかかるしら雲

5010 空にしる物のあはれの行へとて花ちるみねの春のあけぼの

5011 はるたつとききつるものを山のはのかすむはつねのならひなれども

5012 恋はよないもといふつまのならひともしらぬ袖にも涙おちけり

5013 契る中のとほざかり行く心ちして雲まの月をまつかぜの声

5014 のどかにもながむる春の山里は梅のたちえに鶯のこゑ

5015 わするなよまことをしるすもしほ草しきつの浪にくちん世までも

5016 露の身もおき所なき世の中にさきだつ人ぞうらやまれける

5017 みな人のしるべをねがふ身にしあれば子を思ふみちもあはれとぞきく

5018 のちの世にも行きあふさかのうちもがなおとはの山の夏のあけぼの

5019 今朝よりは春の神風吹きかへてみもすそ川の音ぞのどけき

5020 神路山つみみな月のゆふだすきかけてひさしき君が御代かな

5021 のどかなる柳のいとにぬく玉のみだれぬ程の雨のゆふ暮

5022 なるかみのこゑもとどろにきこゆなり雲のうへのぼる山のはの空

5023 いかにせんわがかたをか秋のはの梢の色に山のはの月

5024 萩におく露やちるらむ袖におく涙ももろし萩のうはかせ

5025 杉たてるみわの梢に風さえてあられたばしるゐなのささ原

5026 思ひいづる秋もむかしにたちかへりなどか雲の月は見ざらん

5027 秋のよのふくけしきの松風に木ずゑをわくる月ぞさやけき

5028 秋はまだ時雨もはてぬ山のはの木のままの月のいかにさゆらん

5029 いかがせむなれぬる山の秋の月都もおなじ光なれども

5030 ながめしるころの色のみゆるかなこよひは月にとふ人もなし

以上、24首の歌群である。

14首の歌群に見られる「故者忌日」は、藤原良経の「忌日」のことである。それは、建永元年(1206)3月7日のことである。

建永元年三月七日、摂政従一位藤原良経暴ニ薨ズ(史料綜覽 卷4 231頁)

24首の歌群の中には、「いかにせん」(5007)、「いかにせん」(5023)、「いかがせん」(5029)、と3回も「いかにせん」が、用いられているのである。この歌群に見られる「なれぬる山の秋の月」(5029)は、「都もおなじ光なれども」(5029)の表現から考えても、この「山」は、比叡山であることは、間違いあるまい。作者・慈円は、住み慣れた山住みの暮らしから、「述懐」していることがわかるのである。

これら2つの歌群については、稿を改めて、考えてみたいと思っている。

以上が、本稿での論述である。

## テキスト

- 1、白氏文集歌詩索引 下冊(全3冊)(底本は、那波本)、平岡武夫、今井清 編著、同朋舎出版、1989年初版
- 2、拾玉集(新編国歌大観)(底本は、青蓮院蔵本)、角川書店、昭和60年初版
- 3、拾遺愚草(新編国歌大観)(底本は、書陵部蔵本)、角川書店、昭和60年初版
- 4、拾遺愚草員外(新編国歌大観)(底本は、書陵部蔵本)、角川書店、昭和60年初版

## 参考文献

- 1、白氏長慶集(底本は、明の萬曆中馬元調校本)、長沢規矩也編、汲古書院、昭和49年初版
- 2、「白氏文集」の解釈本について、  
「白氏文集」(一・二・三・四・五・六・七・八・九・十・十一・十二・十三)  
新釈漢文大系、岡村繁編著、明治書院発行。このうち、2010年現在発行されているのは、(二上・二下・三・四・五・六・七上・八・九・十二上)
- 3、文集百首全釈(歌合・定数歌全釈叢書八)、文集百首研究会著、風間書房、2007年初版
- 4、六家集、拾玉(七巻本)(和本)、國學院大學図書館蔵、武田祐吉博士旧蔵本(911.147/6/(3)(4)(5)(6)(7))
- 5、拾玉集(上)、(和歌文学大系58)、久保田淳監修、石川一、山本一、著、明治書院発行、平成20年初版
- 6、藤原定家歌集、佐々木信綱校訂、岩波文庫、1931年初版
- 7、訳注 藤原定家全歌集(上下2冊揃)、久保田淳著、河出書房新社発行、昭和61年初版
- 8、白氏文集歌詩索引 上冊、中冊、下冊(全3冊)(底本は、那波本)、平岡武夫、今井清 編著、同朋舎出版、1989年発行初版
- 9、歌合・定数歌全釈叢書五「堀河院百首全釈」(上、下2冊揃)、滝澤貞夫著、風間書房発行、2004年初版
- 10、藤原定家とその時代、久保田淳著、岩波書店、1994年初版
- 11、慈円詠歌年譜、石川一著、上戸学園女子短期大学紀要第11号、昭和56年
- 12、慈円和歌論考、石川一著、笠間書院、平成10年初版
- 13、西行全集、久保田淳編、日本古典文学会発行、昭和57年初版
- 14、新古今和歌集全評釈(全九巻)、久保田淳著、講談社発行、昭和51、52年初版
- 15、新編国歌大観、第三巻(私家集編I)、角川書店発行、昭和60年初版
- 16、和訳新註・白氏文集(全3巻)、文学博士服部宇之吉序、支那哲学研究会訳注、東京、菊地屋書店、明治44年刊
- 17、白居易研究、花房秀樹著、世界思想社、1971年刊
- 18、白詩新釈、簡野道明著、明治書院、昭和8年刊
- 19、白居易と元稹、金在乘氏(「白居易の文学と人生」、(白居易研究講座、第二巻)、勉誠社、平成5年刊)
- 20、白楽天の論悦一生きる叡智の輝き、下平雅弘著、勉誠社、2006年刊
- 21、白居易年譜、朱金城著、上海古籍出版社出版、1982年刊
- 22、改訂・新潮国語辞典一現代語・古語一 久松潜一監修、新潮社版、昭和40年初版
- 23、邦訳・日葡辞書、土井忠生・森田武・長南実 編訳 岩波書店 1980年5月刊
- 24、大字典(特装版)、上田万年・岡田正之・飯島忠夫・柴田猛猪・飯田伝一 編集 講談社刊 大正6年初版
- 25、古今和歌集、新 日本古典文学大系5、小島憲之 新井栄蔵 校注、岩波書店、1989年初版
- 26、後撰和歌集、新 日本古典文学大系6、片桐洋一 校注、岩波書店、1990年初版
- 27、拾遺和歌集、新 日本古典文学大系7、小町谷照彦 校注、岩波書店、1990年初版
- 28、後拾遺和歌集、新 日本古典文学大系8、久保田淳 平田喜信 校注、岩波書店、1994年初版
- 29、金葉和歌集、詞花和歌集、新 日本古典文学大系9、川村晃生 柏木由夫 工藤重矩 校注、岩波書店、1989年初版
- 30、千載和歌集、新 日本古典文学大系10、片野達郎 松野陽一 校注、岩波書店、1993年初版
- 31、新古今和歌集、新 日本古典文学大系11、田中裕 赤瀬信吾 校注、岩波書店、1992年初版
- 32、史料綜覧 卷四(全17巻)、東京大学史料編纂所編纂、東京大学出版会発行、昭和2年初版
- 33、慈円の和歌と思想、山本一著、和泉書院、1999年初版